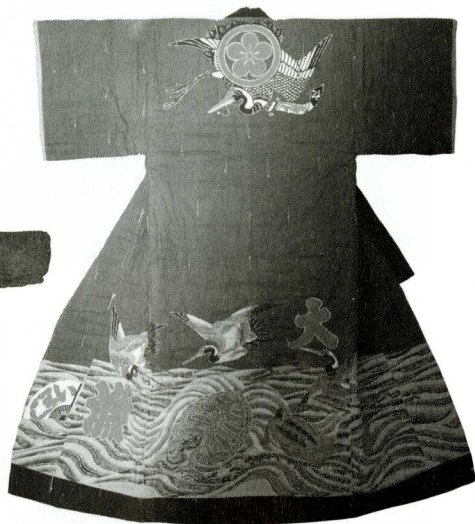




子ども用のジャケット。
縞模様の綿入れ
(標本番号H235273)

中国の男性用長衣。
裏地がとても派手な綿入れである
(標本番号H170677)



綿入れの大漁着
(標本番号H32014)



指摘もある。これらは、映画

この考えの延長線上のようにも考えられ

寒冷地で、動物脂肪を食料にも燃料にも使っているところでは、袖口や胸元だけでなく、ところかまわず脂でべとついている衣服をべつに気にもせず着ていることがある。それが文化なのだといわれると、割り切るよりないのだけれど。ともかく、このような綿入れは手入れがなかなかやっかいな代物なのである。にもかかわらず、日本では伝統的に綿入れの着物や襦袢などを愛用してきた。近世では、綿地で綿の入った衣服を小袖とよんで最上のもので、その小袖を二枚、三枚と重ねて着るのが一番の贅沢で、三枚襲といえは女性の礼装の基準だった。礼装は別にしても、冬のあいだは綿入れ、四月になると袷あじになり、梅雨

四月になると袷あじになり、梅雨

が上がるころに単衣ひとえにかわる。

明治中期からあと、初夏には

外国からの毛織物のセルヤ

ネルの着物が加わっている。

ところが、一九二〇年代に

入ると、綿入れ廃止の動きが

出てくる。洗濯ができないた

めの不潔さもおおきな理由

だが、もっと興味深い理由は、

着物の袂たもとや羽織にまで綿を

入れて着たときの不格好さ

の指摘である。また、別の記

録では、大正期のはじめには

三枚襲が稀になったという

指摘もある。これらは、映画

モノグラフィ

綿入れ文化

高橋 晴子 (たかはし はるこ)

大阪樟蔭女子大学教授・
本館客員研究員



岩手県の背負い運搬具。
現地衣服名はサルハッピ。
裏面全体の中綿がむき出しになっている
(標本番号H17404)



小さな布をはぎ
合わせた綿入れの
長襦袢。
手首の部分が細く
なっている
(標本番号H121062)

気がついてみると、冬の街を歩く人の姿に、このころはレザー・コートがめつきり少なくなつた。誰も彼もがダウン・ジャケット風の装いをしてるように思える。映画「バック・トゥ・ザ・フューチャー」の一作目のなかで、二〇年ほどむかしの時代にタイム・スリップしたマイケル・J・フォックス扮する若者に向かつてその時代の人間が、「海難救助隊か？」と尋ねるシーンがある。一九六〇〜一九七〇年代には詰め物をしたパッテイド・ジャケットが、そう普通には街中で見られなかつたためである。中綿を入れた衣服は軽くて暖かい。本物のダウンなどにこだわらなければ、レザーの二〇分の一以下の値段で手に入るという魅力もある。もっとも革ジャンに比べれば汚れも傷みも早い。

つと検索してみよう。(服装・身装文化データベース)の衣服標本データ群に検索語「綿入れ」と入力してみる。約三〇〇件がヒットした。画像をひとつひとつ見ていると、ひどく傷んで手に負えそうにないものも含まれている。たいていそういうのはぐんと匂うくらい垢染みていて、あちらからこちらからも中の綿が顔を出してしまっている。

中国、日本ではむかしから、寒い季節には綿入れ衣料を手離せなかつた。しかしこれは仕立てるのも面倒なら、清潔に着るのもたやすいことではない。とりわけ



着古された綿入れのおくるみ。
手足が出せない
ひと続きのデザイン
(標本番号H120834)